

病虫害発生予報 第5号(8月予報) について

令和6年度病虫害発生予報 第5号(8月予報) を別添のとおり発表します。

(連絡先)

担当課室	鳥獣害対策課	農作物病虫害防除所
担当者	岩倉	岡本晃久
電話	073-441-2905	0736-64-2300

病害虫発生予報 第 5 号（8 月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

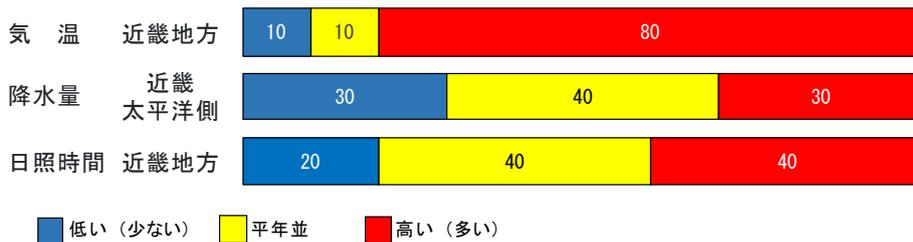
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量	
水稲	いもち病	並 県北部・中部 並 県南部 やや多	野菜全般	ハスモンヨトウ	並 並	
	紋枯病			シロイチモジヨトウ		
	縞葉枯病	並 並 並 やや多 並 並 やや多 やや多	カンキツ	黒点病	並 やや少 やや多 並 並 並 多 並 並 やや多 並	
	ヒメトビウンカ			かいよう病		
	ツマグロヨコバイ			ミカンハダニ		
	セジロウンカ			ヤノネカイガラムシ		
	トビイロウンカ			チャノキイロアザミウマ		
	イチモンジセセリ			ゴマダラカミキリ		
	コブノメイガ			カキ		炭疽病
	斑点米カメムシ類					うどんこ病
	円星落葉病					
トマト・ミニトマト	疫病	並 多	果樹全般	角斑落葉病	多 並 並 やや多 並	
	黄化葉巻病			フジコナカイガラムシ		
野菜全般	アブラムシ類	やや少 多 並 並		カメムシ類		多
	ハダニ類					
	ミナミキイロアザミウマ ミカンキイロアザミウマ					

気象予報

近畿地方 1 か月予報（07/27～08/26）

2024年07月25日 14時30分 大阪管区気象台 発表		
特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう 1 か月 07/27～08/26	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。
1 週目 07/27～08/02	気温	1 週目は、高い確率80%です。
2 週目 08/03～08/09	気温	2 週目は、高い確率80%です。
3～4 週目 08/10～08/23	気温	3～4 週目は、高い確率70%です。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）



I. 水 稲

1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率25%、発病株率5.7%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率13%（平年21%）、発病株率は0.7%（平年4.2%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期に追加防除を行う。

② 常発地では翌年から罹病性品種の作付けを避ける。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 県北部・中部 並
県南部 やや多

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は33%（平年7%）、発病株率は4.7%（平年0.4%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率2%、発病株率0.2%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 穂ばらみ期に発病株率が20%以上のほ場では、早急に薬剤防除を行う。

② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加防除を行う。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率1%、発病株率0.1%）であった。

③ 媒介虫であるヒメトビウンカの8月の発生量は並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 本病の発生が多いほ場では、ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では8.2頭（平年4.9頭）、県北部および中部の普通期栽培では0.3頭（平年10.9頭）であった。

② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市14頭（平年3.5頭）、上富田町0頭（平年1.1頭）、那智勝浦町1頭（平年8.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 縞葉枯病の発生が多いほ場では、本虫の防除を行う。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では5.5頭（平年1.8頭）、県北部および中部の普通期栽培では0.2頭（平年1.5頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市10頭（平年4.2頭）、上富田町11頭（平年18.5頭）、那智勝浦町95頭（平年196.2頭）であった。

6. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では31.7頭（平年24.4頭）、県北部および中部の普通期栽培では2.5頭（平年14.7頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市357頭（平年20.6頭）、上富田町137頭（平年73.2頭）、那智勝浦町41頭（平年68.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に株あたり成幼虫10頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

7. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0頭（平年0.03頭）、県北部および中部の普通期栽培では0頭（平年0.2頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市4頭（平年2.3頭）、上富田町0頭（平年18.0頭）、那智勝浦町1頭（平年22.4頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫5頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

8. イチモンジセセリ（イネツトムシ）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたりツト数は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0（平年0.02）、県北部および中部の普通期栽培では0（平年0.01）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢幼虫の防除に重点を置く。

9. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり上位2葉の被害は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では2.0葉（平年1.2葉）、県北部および中部の普通期栽培では0.9葉（平年0.2葉）であった。
- ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による7月1日～7月20日の誘殺数は1頭（平年1.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

10. 斑点米カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培の本田における7月中旬の捕虫網20回振りによる捕獲虫数は17.3頭(平年4.1頭)であった。
- ② 予察灯による7月1~20日の誘殺数は、紀の川市13頭(過去9年の平均73.9頭)、上富田町47頭(過去9年の平均31.8頭)、那智勝浦町292頭(過去9年の平均149.9頭)であった。
- ③ 8月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
- ② イネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までにはほ場周辺を除草する。
- ③ イネカメムシが多く生息しているほ場は、不稔被害防止のため出穂期に防除する。
- ④ カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期(出穂3日後)に薬剤散布する。出穂後、本田内で大型のカメムシ類の飛来を認めたら、乳熟期(出穂10日後)から糊熟期(出穂20日後)に薬剤散布する。

※ 水稻害虫の発生動向については、鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稻害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

II. 野 菜

<トマト・ミニトマト>

1. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は0%(平年5%)であった。
- ② 8月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。
- ② 露地栽培では、降雨前の予防散布に努める。降雨前に散布できなかつた場合は降雨後に早急に防除する。

2. 黄化葉巻病

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は100%(平年41%)であった。
- ② 8月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
- ② 施設栽培では育苗ほ、本ほとも施設開口部へ目合い0.4mm以下の防虫ネ

- ットを展張し、媒介虫であるタバココナジラミの侵入を防止する。
- ③ 施設栽培では、定期的な薬剤散布および定植期の粒剤処理等により、育苗期から本ほ初期のタバココナジラミ防除を徹底する。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の生息葉率は、ワタアブラムシ0%（平成1.1%）、モモアカアブラムシ0%（平成0.9%）であった。
 - ② 黄色水盤（紀の川市）による7月1～20日の飛来数は27頭（平成19.9頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および生息葉率は、カンザワハダニでそれぞれ78%（平成29%）、15.6%（平成5.5%）、ナミハダニでそれぞれ33%（平成10%）、12.4%（平成2.6%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は22%（平成14%）、生息葉率は0.7%（平成2.4%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ナスでは、収穫果実の選別時に被害を認めたら防除を始める。
 - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ③ 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
 - ④ 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および生息葉率は、いずれも0%（平成：発生ほ場率3%、生息葉率0.2%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. ハスモンヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発

生ほ場率 3%、生息葉率 0.1%) であった。

② フェロモントラップによる 7 月 1～20 日の誘殺数は、和歌山市 141 頭（平年 143.5 頭）、紀の川市 57 頭（平年 117.5 頭）、御坊市 55 頭（平年 162.6 頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。

② 抑制栽培エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後 40～50 日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

6. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① フェロモントラップによる 7 月 1～20 日の誘殺数は、紀の川市 17 頭（平年 26.8 頭）、御坊市 49 頭（平年 66.7 頭）であった。

② 8 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ハスモンヨトウに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 7 月中旬の果実での発生ほ場率は 30%（平年 26%）、発病果率は 7.2%（平年 5.0%）であった。

② 8 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 秋雨時期における後期感染防止のため、8 月中下旬の防除を徹底する。

② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯枝が増えるおそれがあるため、かん水等の栽培管理を適切に行う。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 7 月中旬の春葉での発生ほ場率は 16%（平年 28%）、発病葉率は 0.3%（平年 1.0%）であった。

② 8 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 台風の接近等で強風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行う。

② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。

③ ミカンハモグリガによる新葉の食害痕は病原菌の侵入口となる。幼木や高接樹では新葉が発生しやすいため本害虫の防除を徹底する。

④ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は44%（平年22%）、発生葉率は14.6%（平年5.6%）、100葉あたり雌成虫数は59.8頭（平年17.0頭）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は年間に2回以上使用しない。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第2世代2齢幼虫の発生最盛期は8月下旬頃と考えられる。発生ほ場ではこの時期に、散布むらがなく葉裏までかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）、果実の被害ほ場率は20%（平年18%）であった。

② 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる7月1～20日の誘殺数は、由良町128頭（平年158頭）、有田川町79頭（平年144頭）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。

② 発生ほ場およびイヌマキやサンゴジュに隣接するほ場では防除を徹底する。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 成虫の捕殺に努めるとともに、放任ほ場周辺など発生の多いほ場では、産卵防止および食入幼虫対象の防除として薬液を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」31%（平年5%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平年0%）であった。

② 県北部における7月中旬の発病果率は「富有」1.3%（平年0.4%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。

② 台風が接近する場合は事前に薬剤を散布する。散布できなかつたほ場では台風通過後速やかに散布する。

③ 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかり、薬液をかかりやすくする。

④ 令和6年度病害虫発生予察注意報第5号（令和6年7月30日発表）を参照する。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」69%（平年66%）、
「刀根早生」・「平核無」24%（平年22%）であった。

② 県北部における7月中旬の発病葉率は「富有」5.9%（平年4.4%）、
「刀根早生」・「平核無」0.7%（平年0.8%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。

② 一般に盛夏期の発病は一時休止するが、山間部や風通しの悪いほ場は発病を繰り返しやすいので、これらのほ場では秋雨前の予防散布に努める。

3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は31%（平年38%）、発病葉率は1.0%（平年3.2%）であった。

② 県北部では感染時期である5月上旬から7月中旬にかけて降水量が平年並～かなり多く推移した。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 子のう胞子の飛散が続く8月上旬まで防除が必要である。

4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は94%（平年64%）、発病葉率は25.7%（平年10.0%）であった。

② 県北部では感染時期である5月上旬から7月中旬にかけて降水量が平年並～かなり多く推移した。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 本病は7月頃から発病し二次伝染を繰り返すので、多発ほ場では発病後も防除を励行する。

5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」38%（平成48%）、
「刀根早生」・「平核無」6%（平成11%）であった。

② 県北部における7月中旬の寄生果率は「富有」1.1%（平成3.0%）、
「刀根早生」・「平核無」0.1%（平成0.7%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第2世代ふ化幼虫の発生時期は7月下旬～8月上旬頃と考えられる。発生ほ場では8月上旬頃に、散布むらがなくへたにもかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

① 県北部のカキにおける7月中旬の被害発生ほ場率は「富有」81%（平成11%）、
「刀根早生」・「平核無」59%（平成5%）であった。また被害果率は「富有」10.9%（平成0.4%）、
「刀根早生」・「平核無」4.6%（平成0.1%）であった。

② 紀の川市粉河の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが13,934頭（前年114頭、平成466頭）、ツヤアオカメムシが4,490頭（前年6頭、平成185頭）であった。

③ 有田川町奥の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが9,926頭（前年16頭、平成637頭）、ツヤアオカメムシが2,811頭（前年3頭、平成156頭）であった。

④ みなべ町東本庄の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが6,541頭（前年301頭、平成823頭）、ツヤアオカメムシが1,650頭（前年31頭、平成239頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接ほ場では早くから被害が出やすい。

② 飛来の多いカンキツ園では落果が多数発生する可能性があるため、防除を徹底する。

③ カキでは「富有」で被害が大きいため、特に注意が必要である。

④ ほ場内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

⑤ 今後の発生動向については、農林水産部鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

⑥ 令和6年度病虫害発生予察注意報第4号（令和6年7月12日発表）を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○鳥獣害対策課ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/072000/d00216368.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780